

# 義堂周信『空華集』をめぐる

— 禅林文学研究者の憂鬱 —

## 朝 倉 尚

### ○はじめに

義堂周信（一三二五—一八八）の文筆活動のみならず、禅僧の諸活動の実態を探求する折に欠かすことのできない資料が、文物・文芸作品であることは言うを俟たない。義堂の場合、生前に残した文物は多岐の分野に及ぶが、ここでは個人の作品集・別集である『空華集』を対象にして論を進めたい。『空華集』は、主として義堂の創作活動を知るための基本的な資料であり、伝統的な文学観や作品の受容・展開の実態の解明、さらには宗旨の開明や普及を目的とする宗教活動の反映の様相の解明のためにも有益である。

### 1 問題の所在

禅僧の著作物を対象として研究を進める中で、しばしば困惑する問題がある。当該の作品集の底本の決定、本文の妥当性の認定に関

することである。『空華集』の場合、『国書総目録』第二卷（岩波書店・昭39）の『空華集』項に拠れば、写本も登載されるが、主要な諸本としては次の三本である。

#### 1 五山版

2 元禄九年刊版本（略称「元禄版」）

3 五山文学全集所収・活字版（略称「五山文学全集本」）

1・2についても、同時期の他の作品集の版本と比較する時、かなり広範に流布していたと言えよう。が、今日、『空華集』の底本として一般に広く利用されているのは、何と云っても3である。

3は、『五山文学全集』第二輯（巻）に収められる、上村観光編『空華集』二十卷である。この五山文学全集本『空華集』は、以下のごとく、これまでに三たび刊行されている。

イ 明治39年1月 裳華房（東京）・六條活版製所出版部（京都）

ロ 昭和11年4月15日（覆刻） 帝國教育会出版部

八 昭和48年2月15日（複製） 思文閣出版

平成4年11月15日（再版）

五山文学全集本は、異同の一一の注記を欠くためにその実態は香として不明であるが、五山版と元禄版とを対照して校訂を加えたとされる上村氏の言（後）のままに、読解のための底本として用いられてきたのが現状である。義堂の文学活動の大略を知る上では何ほどの障害も無いであろうと判断し、さらには唯一の活字化された本文であるために、これまで五山版、元禄版との本格的な対照を欠いたまま、さほどの不審や不安を感じることもなく過して来た。が、禅林の文学の研究がしだいに深化、普及して、絶海中津（一三三六—一四〇五）とともに「五山文学の双璧」としての高い声誉の実質が問われるようになるにつれて、国文学・和文学において定着している科学・実証を重視した本文校訂・作品処理が急速に要請されるようになってきているのも事実である。

五山文学全集本の編集の不備の一つを「書誌學上及び校勘技術上の處理の不完全」にあるとして、その代表例に「空華集」を取り上げていられるのは、前掲ハの複製版「五山文学全集」別巻に所収の玉村竹二「上村觀光居士の五山文學研究史上の地位及びその略歴」においてである。玉村氏は、上村氏の諸業績を掲げた上での指摘であり、さらに明治末葉から大正前半の未発達の學術分野・學界の現状では、底本と校訂本との概念の区別も成立しておらず、上村氏・五

山文学全集のみが責められるべきではないとも弁護されている。その上で、「空華集」については、五山文学全集本では、

殆ど元禄版にのみよって居り、果して五山版との對校が行はれたか否かは疑問である。解題に五山版と對照したとあるのは、「空華集」にも五山版があることを注意喚起をしてゐるだけのやうに見えるのは遺憾である。

とされる。玉村氏が提示されるべき校訂としては、右の引用の直前に記される、

しかし現在の學術的常識からすれば、古い本、即ち所謂應永の五山版を底本とし、元禄版で校訂をし、元禄版の方が内容が多いため、五山版にない部分のみを拾遺として、その後抄録して加へておくといふことになるであらうが、（下略）

である。玉村氏の所説は至極妥当であると考えられる。

五山文学全集本「空華集」は、上村氏の編した校訂本であるが、対照本である五山版と元禄版との異同の詳細が注記されておらず、実態が不明であるのは事実である。当時の校勘の態度から類推して、五山版との無対校のみならず、上村氏の独自の判断による変更がなされている可能性も存することになる。とは言うものの、五山文学全集本がこれまでに果たしてきた役割は多大であり、現代の讀者、研究者にとってこれ以上に簡便に入手できるテキストは他に見当たらない。ついでには、學術的常識によつて處理された、五山版

を底本とする新たなテキストが出現するまでの間、五山文学全集本を利用することが適當、可能であるか否かを速やかに判断しなければならぬ。上村氏の校訂の態度、具体的には五山文学全集本と五山版・元禄版の両本との関わりを明確にした上で、もしも不備な点が見つかった場合には、これを指摘、修整して利用することが肝心要である。

ただし、五山文学全集本と五山版・元禄版との校訂を一挙に遂行することは至難の技である。後述のごとく、五山版と元禄版とでは、その編纂の方針が異なり、作品集の構成が一変しているためである。ついては、まずは五山版と元禄版との比較を主体として、両版の異同、相違を明らかにすることとする。検討の途次において、玉村氏の指摘のごとく、五山文学全集本が元禄版のみを底本にしている可能性が高いことが予測されれば、両版の比較の結果をそのまま五山版と五山文学全集本の異同、相違として理解し得ることになる。

## 2 五山版・元禄版の成立

五山文学全集本『空華集』の編集方針に関して、集の編者・上村觀光はその「解題」の冒頭において、次のように記している。通行の字体に改めて紹介すると、

空華集は南禅寺慈氏院の第一世義堂禪師の遺稿なり。この集。応永の頃始めて開板せられたるも。その巻佚（佚）を定めず。

分類も亦全からず。降つて元録（禄）九年師点なる人。日本並に写本等を以つて欠落を補ひ。誤謬を正し。一本廿巻となして再板す。今爰に収むるに当り古板並に元録（禄）板の両書を対照して校訂を加へたり。  
(一) 内は稿者

である。『空華集』の版本については、従来、

### 1 応永の頃始めて開板（五山版）

### 2 元禄九年、師点による再板（元禄版）

が存在したことを指摘する。

「五山版」の特徴について、氏は、それが応永の頃に初めて開板されたと刊行年を推定し、次いで巻帙の不定、分類の不全を不備な点として掲げている。五山版『空華集』には刊記を欠いている。が、義堂周信の示寂の年は嘉慶二年（一三八八）であり、収集されている作品内容より示寂後の刊行であることは確実である。とすると、応永年間（一三九四―一四二八）の刊行とする氏の判断は概ね妥当ではあるまいか。なお、川瀬一馬『五山版の研究』（日本古書籍商協会発行、昭45）上巻・解説篇「35空華集（空華文集・空華外集）」において「南北朝刊」とされるのは、元中九年（一三九二）十月の後龜山天皇の京都還歸までを南北朝時代とする説に従えば、義堂生前の刊行の可能性を留保されたものかもしれない。ただし、筆者は上村氏の推定を補強する内部徴証として、五山版・空華文集・説の部の冒頭に「門人 梵意 寺編」と特記する点に留意したい。梵

意、道号は柏堂、義堂の法嗣である。柏堂梵意は、相模国の人で、関東下向時代の義堂に随侍し、義堂の上京後は鎌倉に在って京都との間の連絡役を果たした模様である。が、柏堂が義堂に親侍していたに信任を得ていたかを如実に示すのは、その臨終に際しての「空華日用工夫略集」の諸記事である。衣鉢侍者として身辺の世話に力を尽くし、また義堂の命を忠実に実行している。義堂の最晩年に随侍し、その臨終を看取り、直接に遺言・遺命を受けて、これを実行に移し得たのは柏堂を措いて他にはいない。義堂が生前に蔵した所持品、特に手許に留め置いた書蹟や作品類を知悉し、その管理を依頼されていた可能性は高い。五山版「空華集」の編纂・刊行に柏堂が重要な役割を果たしていたことは確実である。柏堂の示寂は永享六年（一四三四）、時に七八歳であった（玉村竹二「五山禅僧伝記集成」柏堂梵意項参照）。この点からも、「応永の頃」とされる推定は誤っていないと考える。

不備な点として指摘した、巻帙の不定と分類の不全については、元禄版に付される師点「寂刻空華外集」文において、すでに

舊本不<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>巻帙<sub>一</sub>、分<sub>レ</sub>類<sub>之中</sub>亦或<sub>ハ</sub>混雜<sub>ス</sub>、

とする。上村氏は、師点の掲げるところを参照・引用したかのごとくである。いずれにしても、五山版の不備として指摘している訳であるが、具体的に意味するところは、いささか判然としない。「不定巻帙」における巻帙は、巻物と綴本、転じて書籍の意に用いる

が、他に巻数の意に用いることもある。旧本・五山版では、現状では外集四冊、文集四冊の八冊本であることが多い。が、別掲のごとく冊の内容が、文集・序の部の二冊を除き、一定でないのが特徴である。各冊はジャンルや詩型の別によって類別された「部」（以後、「部類」とも呼称）より構成されるが、各部類の作品量が一樣ではなく、多少の差が極端であることに原因しよう。各部類内の作品数と配列は五山版の諸本間で大略一致しているが、冊として構成するに際しての各部類単位の配置順は、文集の二冊を除いて一樣ではない。作品量の多い部類では二分冊とされるが、分冊に当たつての刻工の特別の配慮は見当たらず、分冊者が自らの判断で適当と認めた箇所まで二分している（例外の「序」部の二冊は、各冊の版心に「二」以下の丁付けを施す）。このような状況下では、師点が掲げる巻帙の不定とは、部類単位の配置順の不定を指しているとも、あるいは部類の恣意的配置によって数種類の冊数の異なつた諸本が成立していたことを指しているとも解される。ただし、後者については現時点では可能性の指摘に止まる。次いで、「分類」については、師点が「混雜す」としたのに対し、上村氏は「全からず」とする。両者の真意は奈辺に存するであろうか。「類を分つ」「分類」については、前述の「部」を立てていることを指すであろう。この分類Ⅱ部立てにおいて、師点は「混雜す」と評し、上村氏は「全からず」と評するのである。この点に関しては、そもそも五山版の編者の「部」

の作品内容と師点の考える「部」の作品内容との間に、微妙な相違点が生じたことに起因しているのではあるまいか。両版を比較すると、元禄版では、所収作品は少ないが、「楚辞」「五言排律」「七言排律」等の新たに立てられた「部」が存在する。また、「部」の名称は一致しているが、これを構成する作品の内容や数量が異なる例も存する。微妙な差異であることが多いが、「題跋」「序」「雜著」の部においてはその差は顕著である。師点の場合、直接に作品を検討することによって五山版の「部」の状況を「混雑」と観じ、自らの見識・方針によって整理・調整している。上村氏は、両版をおおまかに比較して、元禄版における調整を可なり完全とした結果、五山版を「不全」と見做したのであろうか。

「初板」の五山版に対する「再板」の元禄版の特徴として、上村氏は欠落の補充、誤謬の訂正、二十巻本の構成を掲げている。が、この叙述も、前掲の師点の叙文の引用の直後に、

余近與友人談及於此、遂以數本一校讎之、補其缺落、正其謬、釐成二十卷、

とあるのを参照したようである。まず、友人と相談して、数本を対照する。師点の言のままを信ずれば、元禄版は友人との協議・合議によって成った本である。合議の対象になった「此」については、単に「空華集」を指すのではなく、直前に掲げられる不備な諸点を指すと解するのが妥当ではあるまいか。巻帙の不定、分類の混雑を

訂すことを念頭にして読解が進められ、最終的に二十巻本として構成される。元禄版の大きな特徴の一つとして、返点と送仮名が施されている点がある。が、これはやはり輪読形式・合議によってはじめて客観性が留保され、さらにその作業を通じて作品の欠落、字句の訛謬（訛は、誤りの意）が訂されることにもなる。元禄版の出現により、一般の読者にとつては、五山版のみに拠る場合と比較して、内容の理解は格段に進歩・深化したことであろう。「五山文学全集」に収録するにあたり、五山版を底本にすることが可能であったにもかかわらず、上村氏があえて元禄版を主たる（全面的に）底本とした理由は、この一事に尽きると考える。

元禄版は厳密に言えば、師点とその友人との合議によって成立したが、中心的役割を果たして序文を製した師点一人が編者に遇されている（ただし本稿でも、「師点とその友人」とはせず、単に「師点」の編纂として表記する）。師点の伝記はそれほど定かではない。上記の序文では、末尾に方印「師点」（陰刻）の下に、方印「即川」（陽刻）を刻している。これにより、元禄版の編者を「即川師点」と解説する書もあるが（大修館書店「禅学大辞典」の「空華集」項）、印刻の位置からして「即川」を道号と解するのは不適當であろう。現状では、正元師蠻（一六二六—一七二〇）の法嗣である「象先師点」を指すとする説に従う（玉村竹二「五山詩僧」へ「日本の禅語録」八。講談社・昭53）ほか）。前掲「禅学大辞典」付録・

禅宗法系譜では、初版（昭53）には登載を欠くが、新版（昭60）では④景川宗隆下に系けられ、

——黙水竜器—— 卍元師蠻 凌明師川

大空祖來 象先師点

とある。編者としては、凌明・象先はいずれも卍元の法嗣のつもりであろう。卍元は延宝六年（一六七八）に「延宝伝灯録」、さらに、元禄十五年（一七〇二）に大著「本朝高僧伝」（七五巻。総計、一六六二名の伝記）を編集したことで知られる。師の事業に触発されたのであろうか、象先が元禄版の編集を終えて序文を製するのは「元禄八年乙亥冬日」のことであり、その開版は翌元禄九年（一六九六）のことであった。

上村氏は実用性を最優先させた結果、元禄版を底本にしたかったものと想像する。これは一つの識見であり、その判断は適切であったと考へる。が、惜しまれるのは、徹底を欠いた点である。若干の調整や補訂の手を加えてはいるが、極めて微々たるものであり、それにもかかわらず、「両書を対照して校訂を加へたり」と明言することである。氏の説明に従えば、五山文学全集本「空華集」は、五山版の欠落を補い、誤謬を訂した上で再構成された象先師点の元禄版と、さらに重ねて五山版とを対照して校訂が加えられたことになる。

### 3 五山版と元禄版の相違点

いまここで前以て、五山版と元禄版との間で大きく異なる点を箇條書きに列ねる。

- イ、不分巻（五山版）↓二十巻（元禄版）
- ロ、刊記の存在（元禄版）―語録の処遇
- ハ、叙文、目次の存在（元禄版）
- ニ、返点、送仮名の存在（元禄版）
- ホ、著者、編者名の表記
- ヘ、他作者作品（混入）の処遇
- ト、作品の欠落、削除、補入の状況
- チ、本文の異同

イ―チについては、それぞれ編纂者の編纂意図が如実に反映されている諸点である。本項では、それらの一―について解説を加える。その上で、五山文学全集本の編者である上村氏が、いずれの編纂意図に拠っているのかを確認する。

#### ○底本の概要

五山版と元禄版の相違点を具体的に検証し、これを提示して検討を加えるに際しては、底本として用いる五山版と元禄版について、その概要を紹介しなくてはならない。

五山版「空華集」の諸本について、前掲・川瀬一馬「五山版の研究」上巻・解説篇の「空華集（空華文集・空華外集）」項では、完本四本とそのほかの五本が掲げられる。本稿では、いずれも完本である東洋文庫所蔵の二本を主な底本とした。一本に限定せず、あえて二本を選んだ理由は、同一文庫内に所蔵されていることにもよるが、五山版が前述のごとく各冊不定の構成であるところから、一見すると異本であるかのごとくに映ずるためである。

A 東洋文庫・岩崎文庫I本（略号、東洋I本）

請求記号、二B b 85。『岩崎文庫和漢書目録』の書名は「空華文集」。一〇冊（含、語録二冊）。初印（但、一冊のみ新写）。『西莊文庫』「宗佐」旧蔵印。見返しに「半隠（花押）」の墨識語。第一冊、縦26・5糎×横18・4糎。旧装表紙の上に新装表紙。新装表紙の題簽「空華文集」には冊順「甲（↓癸）」が朱記。いま、本稿で用いた私に定める冊順と新装、さらに旧装の冊順とを対応して図表化すると次のようになる。なお、私の冊順は、元禄版との比較を容易にするために、外集（詩）↓文集↓語録の順に定めた。

冊順(秘)	新表	旧・表	備考(構成内容)
第一冊	庚	丁	外集。序・文・空華室歌・七言絶句(前半部)
第二冊	辛	己	外集。七言絶句(後半部)
第三冊	壬	庚未)	外集。七言八句(前半部)
第四冊	癸	辛庚)	外集。七言八句(後半部)
第五冊	甲	甲	文集。序(前半部)
第六冊	乙	乙	文集。序(後半部)
第七冊	丁	壬	新写。文集。説・銘・歌・祭文・題跋・雜著・古詩・跋文 <sup>※</sup>
第八冊	丙	丙	文集。記・疏・書
第九冊	戊	戊	語録。空華室歌・入寺語録・陞座
第十冊	己	〔癸〕	語録。拈香・小仏事・仏祖慶讚・真讚・自讚・道号・跋文 <sup>※</sup> (新写)

〔注〕1 新表⇨新装表紙、旧・表⇨旧装表紙である。「旧表」欄の( )内は訂正以前の冊順記号を示し、「( )」内は、現状は空白であるが、あるべき冊順記号である。

2 「備考」欄の※印は、当該配置に疑問の存することを示す。

B 東洋文庫・岩崎文庫Ⅱ本（略号、東洋Ⅱ本）

請求記号、二B b 9。文庫目録の書名は「空華外集」。八冊。やや後印。「日夏千手寺」「守山藏書」「雲邨文庫」旧蔵印。第一冊、縦25・7糎×横18・3糎。語録二冊を欠くが、冊順は東洋Ⅰ本に倣い、外集↓文集の順で私に定める。

なお、二本の体裁に関しては、右記より詳細な紹介が「岩崎文庫貴重書誌解題Ⅰ」（東洋文庫・平2）の当該項に存する。

元禄版については、「国書総目録」第二卷（岩波書店・昭39）の「空華集」項に拠ると、十九本の所在が登載されている。が、本稿で底本として用いるのは、次の二本である。いずれも元禄九年の刊記を有するが、一本には補刻の痕跡が認められるためである。

a. 西尾市立岩瀬文庫本（略号、岩瀬本）

請求記号、78-8。五冊（旧、十冊）。二冊宛を一冊に改装したもので、各冊の題箋に十冊本の奇数冊のそれを利用してのことからも判明（偶数冊所収の部類名について墨書により補い、巻数については新たに墨書した小紙片を貼付する）。初版か。

b. 国立国会図書館本（略号、国会本）

請求記号、143-49。十冊。やや後版か。

なお、以下の検討に際し、五山版の二本については各書類ごとに、元禄版については各巻ごとに私に作品番号を施した。作品の題辭上等に付する番号がそれである。

(イ) 不分卷（五山版）↓二十卷（元禄版）

不分卷（五山版）↓二十卷（元禄版）であることは、各本を見ただけでも明白となるが、少くその内実について触れる。ただし、紙数の関係上、それぞれの部類や巻を構成する作品（数量・配列）の対照の詳細については、別稿に譲らざるを得ない。

五山版については、編纂者（僧）がまだに分明でない（一部については明記。後掲）。そのためか、あるいは刊記を欠くためか、同時刊行の作品集の範囲が確定されているとは言い難いのが現状である。一般的には、五山版で刊行された義堂の作品集は、

空華集

義堂和尚語録

の二集とされる。が、前掲・川瀬一馬「五山版の研究」上巻・解説編において、「35空華集（空華文集・空華外集）」と「29義堂和尚語録」とを立項しながら、前者の解説においては「其時の開版」であるとされる。そこで解決の端緒を内部徴証に求めようとする時、部類別の標題としての内題が、例えば東洋Ⅰ本で示すと、

空華外集 七言絶句

（第一冊・本文1丁才）

空華文集

序 五壺沙門釋義堂（第五冊・本文1丁才）

義堂和尚初住相州海雲山善福寺語録

門人 中圓 等編

のように記される。五山版の編纂者は、まずは義堂の作品に対し、



詩作を内容とする「外集」、文を内容とする「文集」、語録を内容とする「語録」に三分して分類、構成しようとした意図・編纂方針を窺い知ることができる。次いで、語録においては少しく様相を異にするが、詩と文の各部類の冒頭においては、原則として「空華外集」と「空華文集」の別を表記している。不分巻の集とは言いながら、各冊が詩としての「空華外集」、文としての「空華文集」にまとめて構成されようとしている。外集と文集とが同時の刊行であることを強く印象付ける。一方、語録においては、入寺語録については「義堂和尚——語録」型の標題であるが、法語や偈頌については、例えば「陞座」「道号」等とそのジャンルを直接記すのみで、「空華語録」を冠することをしない。この様式の不統一のみを取り上げて言えば、別時の開版とも解されよう。

「其時の開版」の可能性を窺わせる状況としては、外集・文集・語録の作品量(丁数)の比が大略2・2・1であることにもよろうが、東洋I本が外集四冊・文集四冊・語録二冊の十冊本として構成、所蔵されている点がある(川瀬氏前掲書参照)。さらに、外集の一部(七言絶句の部。東洋I本の第一冊・二冊に相当)の一冊と語録(東洋I本の第九冊・十冊に相当)の一冊とが一本を構成する例もある。内閣文庫所蔵の「空華外集」(改訂内閣文庫圖書分類目録)所掲書名。請求番号、特123-3。表紙外題「空華集」である。同時に版行された五山版より、読者(所蔵者)の意向により、七言

絶句の部と語録の部を取り出して冊を構成したとも考えられよう。ただし、外集・内集の一部と語録の一部を取り合わせた冊の構成ではなく、語録の部としては完全の状況である点にも留意される。

筆者としては、外集・内集と語録とは異時ではあるが、極めて接近した時期に版行されたのではないかと推量する。そして、作品の性格から判断すると、まず初めに版行されたのが語録ではなかったかと想像する。外集と内集とは在俗の漢詩文の様式や製作目的と大差の無いものもあり、分量的にも語録を圧倒している。禅林、禅僧の読書や考究の対象としては、語録の方が相応しいのは言うまでもない。さらに、「国書総目録」第二卷(岩波書店・昭39)の「義堂和尚語録」の項に拠って五山版以降の刊行の状況を見ると、「空華集」と同じく元禄九年版(建仁寺大中院所蔵)の外に、元禄八年版・享保十七年版・刊年不明版等が登載されている。語録は単独で、しかもそれが当然と言えれば当然であるが、外集と文集の「空華集」よりも広範に流布したようである。語録は外集や内集とは別に処遇されていたのではあるまいか。

元禄版「空華集」は、五山版における外集と文集を、二十巻に再構成したものである。各巻の内容については後に示す(八)項参照)。

(ロ) 刊記の存在(元禄版)——語録の処遇

元禄版元禄九年版行「空華集」には語録は含まれていないかに見える。本文・作品に拠る限りでは、五山版(空華外集・空華文

集の作品を、二十巻本として再構成したものである。「空華外集」「空華文集」の標題は用いず、新たに目次を付して利用の簡便を図っている。が、それにもかかわらず、元禄版の編者、あるいは刊行者にとって語録も義堂の作品集として、「共時の開版」であるべきであると企画され、そのように遂行・実現されたと解さざるを得ない証左がある。岩瀬本の末尾に付される刊記に次のごとくある。(読点・中点は私に施す)

神京書肆、上田正真・茨城方英、同刻

空華録并集、都貳十四卷、伏冀流通

永世、扇颯眞風、悉植良因、同圓種智、

元禄九年丙子二月穀旦

謹識

書肆上田正真と茨城方英とが協同で開版し、販売したことが知られる。問題は、その内容が「空華録并びに集、都て貳十四卷」であったことである。空華録は語録、空華集は外集と文集を指すことは明瞭であり、具体的には「義堂和尚語録」四卷、「空華集」二十巻を指す。元禄版を刊行した書肆としては、義堂周信の作品集としては語録と、外集・文集の集とが一部(一揃)であると認識していた。が、実際には、販売・流布の段階において、両者を切り離して、いわゆる分売も可として販路の拡張を図ったのではあるまいか。一部(一揃)としては膨大な作品量で、高価格であったろう。また何よりも、語録と集とでは、購読の目的も異なり、自ら読者・

需要者の層も異なったことであろう。

刊記の書肆「茨城方英」に関連して、以下のことが報告されている。京都の著名書肆である柳枝軒小川多左衛門の本姓は茨城(木)であり、初代は元禄十四年(一七〇一)に死没し、名は方淑である。二代は初名を信清、後に方道に改める。「彰考館館本出所考」に拠れば、元禄十年夏に、「空華集・義堂録」を「茨木」より水戸光圀に献上する(以上、宗政五十緒「近世京都出版文化の研究」へ同朋舎出版・昭57)Ⅱ・三所収「柳枝軒小川多左衛門―書肆の大家―」参照)。方英と方淑・方道との関係が定かでないが、この「空華集・義堂録」こそ、前年一月に刊行された元禄版そのものではあるまいか。「義堂録」は「義堂和尚語録」四卷である。

なお、岩瀬本の刊記は、巻第二十の作品本文の直後に刻されるが、国会本では、この間に中蔵円月が貞治七年(一三六八)春に製した跋文をも刻している。また、岩瀬本の刊記が単純ながら装飾模様の外郭に囲われて刻されるのに対し、国会本では単調な長方形の外郭である。字体は酷似するが、国会本では前出の岩瀬本との間に、次の一文に異同が存する(傍点は稿者)。

空華録并集、都二十四卷、

貳二であり、意味上の変化はない。が、跋文の有無とも併せ考えると、両本は別の版(印)本であり、国会本が後版ということになりはしないか。

五山版には刊記を欠く。五山文学全集本も欠いている。

(八) 叙文、目次の存在(元禄版)

叙文「叙刻空華外集」は編者・象先師点が元禄版のために製した一篇である。言うまでもなく五山版には欠いている。五山文学全集本は元禄版に準拠している。

目次も元禄版に固有である。一覧表化すると次のようになる。

卷一	空華歌季源	序中殿
卷二〜五	古詩・歌・楚辭 四言絶句・五言絶句・六言絶句・七言絶句	
卷六	七言絶句	
卷七〜九	五言律・五言排律	
卷十	七言律	
卷十一〜十四	七言律・七言排律	序
卷十五〜十七		説
卷十八		記・書・題跋・雜著
卷十九		疏
卷二十		銘・祭文・跋

卷第十八の「書」については、該当の箇所に作品を欠く。実際に「書」作品が収載されるのは卷第十四である。次いで、卷二十の「跋」は、前述の中殿の跋文を指すが、岩瀬本ではこれを欠いている。

五山版に目次を欠くのは、不分巻の作品集であったためである。五山文学全集本は元禄版に準じている。ただし、「跋」については返点、送仮名を施していない(国会本には施されており、五山版による補入であることを示す)。

(二) 返点、送仮名の存在(元禄版)

五山版と元禄版との間で大きく異なる点の一つが、返点と送仮名の有無である。五山版では存在せず、元禄版において施されている。五山文学全集本では、元禄版に忠実に準拠しているが、五山版にのみ収載・存在すると判断し、編者・上村氏が補入したと目される作品若干篇については返点、送仮名を欠いている(卷第十八・題跋69(五言絶句)・71・72作品や中殿田月・跋文参照)。

返点・送仮名の存在は、しだいに漢詩文に接する機会が少なくなつた俗人、とりわけ未学・幼少の初心者や童蒙にとつては、読書欲・購買欲をそそるものであった。が、返点・送仮名は本来は便宜的に施されるものであり、これらを施す人の主体的な読解を反映するものであったので、原作者を除き、原作の読みと一致させるのは至難である。作品の本文や内容をかえって損なうことになる危険性も多かつた。作者の心境・悟境の表現を重要視する禅僧の作品にお

いて顕著であつたらう。五山版や写本において返点・送仮名が施されない理由の一つは此辺に存し、単に技術的な問題ばかりではあるまい。鎌倉・室町時代の禅僧にとつては、施す(される)方がむしろ原作者の真意を損なうと解された。読者の僧にとつて、自らの読解力の錬磨に心境の深化を邪魔する存在であつたらう。

(ホ) 著者、編者名の表記

『空華集』所収の作品の作者は、四篇(含、附録・注記処遇)の例外を除いて、義堂周信である。編纂者については、元禄版(象先師点)と五山文学全集本(上村觀光)においては明白であるが、五山版において問題点が残る。五山版の集中での表記の実態について紹介する。

五山版では、語録「義堂和尚語録」における表記についても触れておく。義堂が住持に任じた三寺における語録も収められるが、それぞれの編者名が刻されている。

寺名	所在・寺格	入院年	編者表記	僧名
善福寺	相模・諸山	貞治五年 (一一三六)	門人中四等編	月潭中円
建仁寺	京都・五山	康暦二年 (一一三〇)	門人中季等編	東英中季
南禅寺	京都・五山	至徳二年 (一一三五)	門人周亨等編	大椿周亨

編者の代表として刻される、月潭中円・東英中季・大椿周亨は、いずれも義堂の法嗣である。入院法語や各種説法の場合、師である住持の点検・文飾を経るものの、小師・門人が書記して語録として編集する。このため、入寺語録の冒頭には編者である小師・門人の名が記されるのが通常である。

月潭は、早くより禅門に入り、応安二年(一一三六九)二月時に瑞泉寺の義堂に侍していたことが明らかになるが、正規に度牒簿に名を掛けられたのは同四年三月のことであつた。東英は、鎌倉より帰洛直後に建仁寺・等持寺に住持する義堂の、衣鉢侍者として諸雜事を処理した。大椿は、応安四年五月、柏庭清祖の仲介で義堂の会下に連なり、やがて守亨→周亨に改諱する。時に書記であつた。(この項、『空華日用工夫略集』に拠る。)

五山版『空華集』では、著者名や編者名を表記しているのは、『空華文集』に相当する序と説の部の冒頭である。

空華文集／序 五臺沙門釋義堂 (東洋Ⅰ・Ⅱ本、第五冊)  
 空華文集／説 門人 梵意 等編 (東洋Ⅰ・Ⅱ本、第七冊)  
 東洋Ⅰ・Ⅱ本ともに、第五・六冊は「序」の部であり、版心の「序一(一五十九)」(第五冊)と、「空華序一(一三三)」(序四(一四十八)) (第六冊)とに示されるごとく、独立した冊として構成されるのが特徴である。その冒頭に表記される「五台山門釈義堂」は作者名であり、「五台山門」は義堂の出身の地である土佐国

五台山に因んだ地名である。なお、両本は表記は同一であるが、「臺」の字体が「臺」と「臺」と、異にしている。東洋I本とII本とは刷(版)が異なることがここでも証される。

東洋I・II本の第七冊(Ⅰ本は新写)は「説」の部が主体である。この冒頭の「門人梵意等編」は編者名の表記である。義堂の「説」の部のみは、厳密に言えば、門人・柏堂梵意等の編纂であることを示す。義堂の法嗣である柏堂は、少なくとも鎌倉在任時より親侍し、臨終・葬送に際しては衣鉢侍者として諸事を敏速に処理したことで知られる。

意藏主至、先叙寒暄、問京事畢、乃面囑曰、余帰京、必其逝矣、余不欲闇維、但作掩土之備、汝到京、宜與季藏主等和会、速命工造木龕、

〔空華日用工夫略集〕嘉慶2・2・26条)

病の篤い義堂が、湯山に柏堂を呼び寄せた当日条である。「意藏主」が柏堂を指す(因みに、「季藏主」は前出の東英を指す)。生前に義堂自身が編んだ「空華集」も存在したようであるが、本人以外に編纂者を求めるとすれば、師である義堂の意を熟知した柏堂が最適任ではある。義堂の製した作品は、その都度日録(「日用工夫集」)に書き止められていたと推されるが、その日録のある時期については柏堂が管理する立場にあった可能性も高い。かくして、「空華集」編纂に柏堂が果たした役割は、ただに「説」の部に止まらなかつたのではないかと考える。(柏堂については、「五山版・元禄版の成

立」項をも参照)

次いで、「空華集」における著者、編者名の表記が「文集」に限られている点からは、「文集」の全部類が義堂以外の僧の編纂であったことを示唆するかもしれない。詩を収める「外集」については、義堂自身が段階的に手を加えながら成長、成立したために、表記する必要が無かつたものか。義堂が需めた中巖円月の製作時期を異にする、序文(延文四年作。義堂、三五歳)と跋文(貞治六年作。義堂、四三歳)の意味するところは深長である。

元禄版では、五山版を再構成したためであろう、各巻の冒頭一行に、空華集巻第一(一二十)

と刻した上で、続く二行の底部に

日本神京瑞龍山南禪寺慈氏院沙門

釋周信義堂著

と、表記・署名される。「著」とすることく、著者(作者)を示すものである。南禪寺慈氏院は義堂の終焉の地・塔所である。なお、各巻において別表記を見ないが、僧名「周信義堂」は誤刻であろうか。四字で示す場合は「道号+法諱」であり、この逆の法を知らない。法諱の上一字である系字を省略した「信義堂」のつもりであったか。

五山文学全集本の場合は、「空華集巻第一」の冒頭においてのみ、周信義堂著

と署するばかりである。著者名の表記である。同じ誤った呼称法と解されることより、元禄版に拠った表現であることが推測される。誤解を招くだけに、不審・不可解の表記である。元禄版に準拠するのであれば、各巻の冒頭に「日本神京(下略)」を表記する方が、まだしも編者の識見を問われずに済んだであろう。校定者としての独自性を示すための表記であれば、正書法の表記「義堂周信著」にするべきであった。

(へ) 他作者作品(混入)の処遇

「空華集」における他作者作品の入集の状況は次のごとくである。

作者名	作品	題辭	所 在		備 考
			五山版	元禄版 五山全集本	
1 清拙正澄	七言絶句 (同語友和禪居時)		七言絶 句・949	卷五・ (158)(イ)	本韻詩
2 九峰信慶	七言律詩 (遊龍門寺觀瀑布)		七言八 句・462	卷九・ (112)(イ)	唱和詩
3 中巖円月	七言律詩 (題温泉公濟禪師)		七言八 句・464	卷九・113	本韻詩
4 九峰信慶	七言律詩 (題温泉公濟禪師)		七言八 句・465	卷九・114	唱和詩

注: 「所在」欄の(イ)は、当該作品が附録・注記の処遇であることを示す。

(一) 内の数字は、直前の本文の作品番号である。

五山版において本文と同一処遇としたため、元禄版の編者がこれを訂せうとしたが、少しく不徹底であった。五山文学全集本は元禄版に準拠している。

(ト) 作品の欠落、削除、補入の状況

五山版「空華集」には存在するが、元禄版「空華集」のいずれの巻・部類にも収められない欠落の作品は、詩二篇である。一篇は「空華外集 五言絶句」の部の54詩、

北整天神賛

傳説騎箕尾、東方化歳星、何如西府客、永鎮北山靈、

である。ただし、本詩は五山版「義堂和尚語録」真賛の部にも認められる。元禄版の編者は、重複に気付き、「真賛」の部に収められる方が相応しいと判断し、元禄版の「五言絶句」の部からは削除したものと推される。

さらなる一篇は、五山版の「空華外集 七言絶句」の部の819詩である。

二高僧画像

隕葉取來坐作麈、松根白日強安禪、咄哉尊者盍回避、飢虎擡眸満口涎、

820詩も同題「二高僧画像」である。五山版を二十巻本に再構成するに際し、編者が二首中の一首を誤って脱落したと解される。

五山版の異本(版)間の異同も若干認められる。東洋I本に存す

るが、東洋Ⅱ本では削除されている作品がある。「空華文集 序」の部の一篇・140「竺芳序」文である。元禄版では巻第十四の序16作品として収載される。

東洋Ⅰ本に欠落しているが、東洋Ⅱ本で補刻されている作品がある。「空華文集 記」の部の一篇・2「長橋寺水月閣記」文である。初印の後に、新たに養堂の作品が見つかり、急遽補刻されたということであろう。元禄版では巻第十八の記2作品として収載される。

元禄版の異本(版)間に異同がみとめられるのは、巻第十八の題跋の部の65作品である。

岩瀬本―「題江山図示贈」題作品・三行分相当

国会本―「題勝道人常持法華経後」題作品・四行分相当

後印本と目される国会本では、補刻に際して一行分余分に要したため、他が半葉十行であったのに対し、当該半葉は十一行にならざるを得なかった。国会本の編者が「題江山図示贈」作品を削除した因由の一つは、元禄版の原編者が当該作品を五山版の題跋37より元禄版の古詩9にすでに所在を変更していることによる。国会本の題跋65を引用する。

題<sup>x</sup>勝道人常持法華経後<sup>ニ</sup>

此経所説要、在<sup>ニ</sup>妙法<sup>ニ</sup>二字<sup>一</sup>、且道文字句是妙法邪、白紙玄煤是妙法邪、勝道人苟欲<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>二徹<sup>ニ</sup>妙法真源<sup>一</sup>、請試<sup>ニ</sup>捲<sup>レ</sup>卷<sup>ヲ</sup>宴<sup>ニ</sup>坐<sup>ニ</sup>自<sup>レ</sup>観<sup>ニ</sup>、則所<sup>レ</sup>謂<sup>ニ</sup>妙法<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>者<sup>一</sup>現在前矣、

五山文学全集本では、以上の異同に対し、元禄版に準拠している。巻第十八・題跋65作品については、岩瀬本の本文を収載しているため、同本と同様に巻第一・古詩7作品と重複している。

(チ) 本文の異同

五山版と元禄版の本文の異同については、稿者もいまだその作業を終えていない。が、返点・送仮名の有無を除けば、本文間における大きな異同は少ないと感じている。

五山文学全集本は元禄版に準拠している。上村氏は「禪宗」第一六一号(明41・8)所収の「五山文学全集第三輯成る」(複製版「五山文学全集」別巻所掲)において、出版に際しての困難事を十二項(難)掲げられ、その中の写字難・校合難・校正難などの項で原本との対照を力説される。自信・自負の表れと解したい。

#### 4 五山文学全集本の処遇

1項で掲げた玉村氏の発言は、斯界の先達の問題提起として厳粛に受け止めた。が、「應永の五山版を底本とし、元禄版で校訂を」することは正論であるが、一一の作品の所在確認、返点・送仮名の処理等について煩瑣な手続きと作業が必須である。さらに、五山版と元禄版では、「部」の多・少は存したが、作品の出・入は二篇に止まり、この方面における玉村氏の「拾遺」「抄録」の必要は極めて低いことが判明した。

元禄版の編纂意図の特徴は、一言で言えば「実用性の優先」にあると考える。読者の利用の便に資するために、部類を再編成して二十巻本とした。返点・送仮名を施すなどの趣向も加えている。各部類における作品の収載・配列についても、五山版のそれを尊重しながら、時に独自の基準を設けてそれを徹底している。五山版と元禄版は、成立時期、編纂意図・方針を異にし、それぞれが独自の特徴・長所を内包していることは明白である。

かくして、稿者としては、「空華集」としての底本問題は「まず措き、両版の特徴・長所をよく見極めて、読者・研究者の目的の別により、いずれをその底本として用いるかを決することの方がより肝要であることを指摘・提唱したい。特に、資料収集や作品通読を目的とする際には、元禄版の方がむしろすぐれた底本であると考へる。そして、この実用性の見地から、元禄版の価値が高いということになれば、全貌の解明は終えていないが、これに準拠している五山文学全集本は改めて評価されてよいことにならう。

五山文学全集本を再評価したい。ただし、「空華集」底本としては、玉村氏のごとく「學術的な常識」から「應永の五山板」を選ぶべきである。本格的な研究が進むにつれて、五山版の重要性は増すであろう。が、五山版の入手・披見は容易ではない。さらに、元禄版・五山文学全集本と対照・校合することはなお一層容易でない。この困難事を少しでも解消するためには、五山版と元禄版（五山文

学全集本）における各冊・各巻の部類構成や作品配列の基準を解明・確認することが急がれる。次なる課題である。

—あさくら・ひさし、広島大学—